

『山形県立米沢女子短期大学紀要』第五十六号
二〇二〇年十二月刊 別刷

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二〇）

蘭部 寿樹

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二〇）

菌部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（一八） 応永二三年～二八年（一四一六～二二）『米沢史学』三〇～三五号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五五号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四七号（二〇一四～二〇二〇年）

○現代語訳（一九） 応永二九年一月一日から四月三〇日 『米沢史学』三六号（二〇二〇年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二九年五月一日から八月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清 『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生 『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）

村井章介 『綾小路信俊の亡霊をみたー『看聞日記』人名表記方寸考ー』（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

植田真平・大澤泉 『伏見宮貞成親王の周辺ー『看聞日記』人名比定の再検討ー』（『書陵部紀要』六六号、二〇一四年）

松岡心平編 『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

田代博志 『山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割』（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松園齊 『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

植田真平 『伏見の侍ー『看聞日記』人名小考ー』（『書陵部紀要』七〇号、二〇一九年）

（応永二十九年）五月一日、雨が降った。「すべての事がとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。用健がいらっしゃっ

たが、すぐにお帰りになった。

二日、雨が降った。いつものように等持寺法華八講が開始された。

ところで、去年は裏松義資中納言を通して薬玉を將軍家へ贈った。今年も先例に任せて私が取り次ぎますと裏松が言ってきたが、裏松中納言は今、病気で幕府御所へ出仕していないそうだ。

それで広橋兼宣大納言に取り次ぐように命じた。ところが、「これまで伏見宮家を取り次いでいないので難しいです」と広橋は言ってきた。

三日、晴。広橋に重ねて取り次ぐよう命じた。前々は取り次いでいなくとも、そこを枉げて取り次いでいただけなのかと申し入れた。その返事には、それでは田向経良前参議が薬玉を持参するのであれば取り次ぎましようとのことだった。それで田向前参議に持っていくように命じた。

檜皮葺の職人が菖蒲を屋根に葺かせる

四日、晴。檜皮葺の職人が来たので、いつものように屋根に菖蒲を葺かせた。薬玉を室町殿へ進上した。田向前参議が持参して、広橋に託した。同じく室町殿の若君御方には、室町殿御所女房を通して、薬玉を進上した。私の姪である鳴滝殿稚児にも同じく薬玉を贈った。

夜に入って、前参議が帰ってきた。薬玉は広橋が取り次いで、室町殿へお目につけたそうだ。室町殿のお返事は、毎年変わらず薬玉を頂いて、めでたくお祝いたしますというものだった。若君御方の御返事も女房奉書(※)で、以前と同じような内容だった。上皇様より進められて、広橋が取り次いだそうだ(※)。

八講の朝の座が終わって、室町殿は等持寺へお帰りになり、そこでまた講義があった。その間、数時間待って、夕方によく室町殿のお返事があったという。

※女房奉書(にようほうほうしよ)：主人の上意を受けて、女房が散らし書きで書いた書状。主人自身が出すこともある。

※「上皇様より進められて、広橋が取り次いだそうだ」：原文は「仙洞より進めらる。広橋申し次ぐと云々」とある。原文に脱字あるか。

五日、小雨が時々降った。「端午の佳い時節で、とても幸せだ」と予祝した。風呂に入った。その後、いつものように御節供のお祝いをした。お祝いには田向前参議らも加わった。

六日、雨が降った。等持寺八講の最終日である。朝廷が行っている御祈禱の尊勝法は、さらに十八日間延長なさるそうだ。長資朝臣は今夜、ご祈禱で灯火を持つ役を勤めに行く。

七日、晴。暇なので、指月庵へ行った。松崖・田向前参議・重有・長資ら朝臣・寿藏主を連れて行った。

和漢連句

また大光明寺へも行った。長老が留守だったが、衣鉢侍者と出会った。衣鉢侍者も連れて即成院へ行き、和漢連句をした。そして連句を詠みながら、酒を飲んだ。

即成院の稚児を鑑賞する

夜になって、懐紙一折り分詠み終わった。その後、さらに酒盛りとなり、謡も歌われた(※)。即成院の稚児が二人いたので、酒宴の場に連れ出して、稚児を鑑賞した。自他共にひどく酔った。

※「謡も歌われた」：原文では「一声に及ぶ」とある。

ホトトギスが一斉に鳴き出したのは怪異か

十日、晴。門の外の木でホトトギスが一斉に鳴き出した。この里では一日中、鳴き廻っている。近日では珍しくないことだが、このように一斉に鳴き出すのはこれまで聞いたことがない。怪異であろうか。不審

である。後に聞いたところによると、醍醐あたりでもこのように鳴いたそう。この里に限ったことではなさそう。

法安寺の住職が来て、いつものように仁王經を読んでもくれた。沙弥となった聖乗も来た。出家した後、聖乗が来るのは初めてのことである。普通の成人僧侶の服装であった。

今出川家の琵琶の楽譜はすべて紛失した

さて今出川実富前大納言が琵琶の楽譜を欲しがっている。それで私自身が新たに書き写して、二巻分の楽譜を贈った。今出川家に伝わっていた楽譜をすべて紛失してしまったので、琵琶の稽古をするのに新たな楽譜が必要なのだそう。

今出川家家司の重徳が伏見宮家への奉公を望む

今出川家の家司である重徳が伏見宮家に仕えたいと望んできた。宮中では人手不足なので召し使いたいのはやまやまのだが、家計が苦しいので雇えないと断った。残念なことである。それで重徳は最近、花山院家に仕えることになったそう。綾小路信俊前参議の斡旋によるものらしい。

良い家柄の者は西園寺家へ奉公するのが通例

だいたい良い家柄の者は西園寺家へ仕えるものであり、他の家に仕えることはまずない。だから花山院家へ重徳が仕えるのは本意ではないだろう。

後燈録

十一日、雨が降った。大光明寺へ行き、長老の後燈録に関する講義を数時間、聴講した。田向前参議らも一緒に聞いた。

十二日、晴。北側の壺庭の枯れ草を掃除して、砂を撒いた。

数万の蟻による百度詣

さて午後五時の日の入り時分、南側の庭で蟻の百度詣であった。蟻たちは、南の築地際から寝殿南の縁の下に入っていた。蟻は数万の群集で、その列は太い線を引いたように見えた。蟻の百度詣ではよくあることだが、いまだこれほど夥しい数の蟻を見たことがない。この怪異の吉凶はいかがなものだろうか。

聞くとところによると、椎野寺主は今日から七日間、清水寺にお籠もりするそう。

田向長資、六条殿長講堂で後小松上皇の給仕役を勤める

十三日、晴。長資朝臣は六条殿で行われる後小松法皇様のお給仕役を初めて勤めることとなった。このお給仕役は隔月に勤めなければならぬそう。山科教豊朝臣と交替で勤務するという。これまでは楊梅兼英朝臣が勤務していたが、彼が変死したので、法皇様が長資朝臣を指名なさったそう。

宮家の女性たちと双六を打った。そして負け態で酒を飲んだ。田向前参議らも参加した。

十四日、晴。松崖・田向前参議・長資朝臣らが船に乗って、宇治の今伊勢神明社に参詣するそう。

生島明盛が来て、世間話をしてくれた。

十六日、曇。いつものように身を浄めた。冷泉正永が来た。

夜に即成院へ行き、念仏の法会に参列した。宮家の女性たちや田向前参議以下、正永も参列した。

十七日、晴。正永が酒宴を少し準備してくれた。

夜にまた松崖がいらっしやう。月がすばらしいので、少し酒宴をした。生島明盛が謡を歌った（※）。面白かった。

※「謡を歌った」：原文では「一声を詠う」とある。

十八日、晴。毎月恒例の連歌会、いつものように祐譽僧都が当番幹事として準備してくれた。田向前参議・重有・長資ら朝臣・正永・善基・明盛・行光らが参加した。

十九日、晴。正永が帰っていった。夕方に少し酒宴をした。松崖と寿蔵主が参加した。その後、田向家で酒盛りがあったようだ。松崖や退蔵庵の僧二人が来て、酒宴を取り仕切ったそうだ。

なでしこの花見酒

夜に廊御方の部屋で酒宴をした。この部屋の裏庭になでしこ(※)が咲いている。その花見酒をするために、重有朝臣・明盛・広時・有善らが酒宴を企画したそうだ。酒宴は乱舞をするまでに盛り上がった。

※「なでしこ」：原文では「瞿麦」と表記されている。

伏見御所旧跡の一部が田地となっている

二十日、晴。大光明寺で、長老の後燈録に関する講義を聴講した。重有・長資朝臣を連れて行った。帰り道、御所の旧跡で田植えをしているところを見た。その様子は面白かった。

二十二日、晴。建仁寺の正恵西堂せいどうがいらっしやった。この人は妻の二条局の縁者である。二条と会った後、正恵に酒を勧めた。私はまだ正恵に会っていなかったのです、この機会に対面した。正恵が稚児せいのこだった頃、この宮家御所に親しく出入りしていたそうだ。二条の母と正恵は兄弟である。飛鳥井雅縁とも兄弟だという。

紫筍

夕方、惣得庵主理勝と明元らが紫色のたけのこ(※)を持参してきた。※「紫色のたけのこ」：原文では「紫筍」とある。黒紫色のカンチクであろうか。

光厳上皇と光明上皇のご誓約

二十三日、晴。用健がいらっしやったので、心静かに話をした。大光明寺長老のお取り計らいにより、来月一日に用健が塔頭大通院の院主に就任することが決まった。ところがある僧がそれに反対してきた。そのわけは、光厳上皇や光明上皇は親類を大光明寺に住まわせないとお誓いになった。だから父・栄仁親王の息子である用健がどうしてご住職になれましょうかと反対してきたのである。そのために用健が大光明寺へ移住することは、ひとまず延期となった。なんとか鹿苑院主と相談してみますと、長老が申されていた。

せっかく決まったのに、すぐにそれを改変するとは、恨めしい限りだ。たぶん反対しているのは、寿蔵主だと推量する。二人の法皇がご誓約したことについては、証拠となる書類がない。御置文にお書きになられていないのだから、この誓約が本当の事なのか信用しがたいといえよう。宮家が檀家として取り仕切っている寺院に親類が入れないのなら、寺を取り仕切っている意味がない。ただあの僧が反対したくて、嘘を言っているのだろう。このような事情を鹿苑院主にしつかりと伝えて下さいと私から長老に申し入れた。

二十四日、晴。今日、塔頭大通院が開かれた。僧たちを招いて、軽食を振る舞った。

その後、用健がいらっしやった。用健が院主となる件については、まず長老と相談中であり、鹿苑院主から用健にお話があるまでは用健の就任は延期せよとのことだった。反対している人が誰かは隠されているが、あの僧であることはもちろんだ。

ところで徳光院主の洪西堂と鹿苑院主は友人である。そこで私の手紙を徳光院に持っていき相談してみると用健が言うので、すぐに手紙

を書いて渡した。

二十五日、晴。夕方、用健が来た。用健は朝早く相国寺へ行って、大光明寺長老と相談したという。その結果、徳光院に話を持っていく必要はないだろうとのことだったそうだ。長老自身が鹿苑院主へ直接お話しするし、この件を決してないがしろにはしないと長老が仰っていたそうだ。それで用健は私の手紙を返した。

二十六日、雨が降った。松崖が来た。稚児の洪得と中薩を連れて来た。少し酒を飲んだ。

二十八日、晴れていたが、夜には雨が降り出した。祐誉僧都が一献の酒を少し持参してきた。用健と松崖も来た。祐誉が帰った後、風呂に入った。

琵琶法師の城義に平家物語を語らせる

夕方、蔵光庵に行った。用健・松崖・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・稚児の梵祐らを連れて行った。蔵光庵に琵琶法師の座頭がいたので、平家物語を語ってほしいと頼んだ。それで平家物語を三句語ってくれた。この座頭は、城公検校の弟子の城義という者だそうだ。

六月一日、晴。「すべての事において、とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

朝早く御香宮と愛染明王堂にお参りした。重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。しばらく宮家にご滞在するそうだ。

後小松上皇へ鯉とスズキを贈る

二日、晴。上皇様へいずれも見事な鯉とスズキを一匹ずつ進上した。いつものように冷泉永基朝臣を通して送った。そのついでに自訴のことについても、ご注意を向けていただけるよう仕向けた。

早速お返事が来た。川魚を特においしく頂きましたとのことだった。また訴訟のこともないがしろにはしませんとの仰せがあった。まずは恐れ多く、うれしいことである。

梅若が猿楽を演じる

室町殿が上皇御所へ行かれたそうだ。御所では梅若が猿楽を演じたという。それで御肴が必要だったので、今回の贈答はちょうどいい時機だった。この御肴で室町殿のご機嫌もよく、その点でも上皇様はお喜びであったと、永基朝臣は言っていた。こちらとしてもうれしいことである。

四日、晴。松崖が来た。稚児の胃堅と洪得も来た。胃堅は松崖の御寮に同宿しているという。胃堅は天龍寺に入門中で、この一兩日、嵯峨から伏見に来ていた。それで稚児を愛でるために、稚野寺主が宮家へ招待なさって酒宴を開いたそうだ。

殿上の間を会所として一献の酒宴となった。私もまたお代わりの酒を用意して、数献の酒宴となった。田向前参議・重有朝臣・具侍者も参加した。広時も参加した。酒盛りで歌舞もなされて、とても楽しかった。

称光天皇の内臓疾患が悪化している

さて聞くとところによると、天皇陛下のご病状がこのところ悪化しているそうだ。内臓を損なっているらしい。それでご祈祷が行われた。長資朝臣は朝廷の小番を勤めに行っている。

後燈録

五日、晴。大光明寺へ、長老の後燈録に関する講義を聴講しに行った。稚野・田向前参議・重有・長資ら朝臣を連れて行った。物得庵主や明元ら、それに尼二〜三人も来ていて、同じく聴講していた。

講義が早々に終わったので、指月庵へ行った。その後、退蔵庵へ行き、夕涼みをした。退蔵庵主と雑談して、夕方、宮家へ帰った。七日、にわか雨が時々降った。祇園会の内祭を宮家の面々が行った。椎野・松崖・宮家の女性たち・芝殿・田向前参議らが設営した。一献の酒宴の準備を寿蔵主が担当した。

田向家の年始節養

九日、雨が降った。田向家へ行った。これは年始節養せちやしんかいの酒宴である。これが今まで延期されていたので、ことさら皆が言い出して実施することになった。

私の息子・娘達・椎野・東御方・廊御方・兄の後家である上臈・二条・今参らを連れて行つた。塔頭御寮恵芳・惣得庵主・明元らも来ていた。男どもも大勢いた。三献終わって、しばらく休憩した。とても酔つた。その後、用健・松崖・具侍者も入ってきた。それでまた一献の酒宴となり、さらに酒盛りに及んだ。小川禅啓・三木善理らを御前に呼び、盃を与えた。面々が歌ったり舞ったりして、面白かった。夕方に節養は終わり、宮家へ帰った。

琵琶「巖」

ところで、今出川公行前左大臣の後家である陽明禅尼が巖という銘のある琵琶のことで、連絡してきた。

十一日、晴。来たる十三日は今出川公行前左大臣の一周忌なので、前左大臣から来た手紙の裏に書写した法華経寿量品一卷・お布施の錢二貫文・お茶十袋を今出川家へ送った。陽明禅尼が喜んで、几帳面に返事を寄せた。今出川家では前左大臣に関する仏事は行わないらしい。

称光天皇の病状が悪化する

十二日、晴。聞くところによると、天皇陛下のご病状はとても悪化しているようだ。上皇様へお見舞いを差し上げたらいかがですかと冷泉正永が助言してくれたので、すぐにお見舞いのお手紙をさしあげた。朝廷へも

典侍禅尼を通してお見舞いを申し入れた。

それにしても天皇陛下のご病気をめぐって、不思議な噂が流れているようで、驚くばかりである。来たる十五日にも朝廷で病氣平癒のご祈禱が行われるようだ。

願ひ事があって、法安寺薬師へ参詣した。椎野も一緒に参りした。重有・長資朝臣・慶寿丸を連れて行つた。お参りした後、住職の部屋でお酒をご馳走になった。そしてしばらくして帰った。

十三日、晴。今日は今出川公行前左大臣の一周忌なので、お経を読んだ。

上皇御所別当局が朝廷の勾当内侍に任命される

ところで天皇陛下のご病氣見舞いの手紙を典侍禅尼藤原能子殿に送つたところ、返されてきた。その理由は、朝廷の勾当内侍の職に東坊城秀長参議の娘である上皇御所別当局が任命されたからだそうだ。そしてこの別当局が先頃朝廷の長階局へ移住したという。そのために、典侍禅尼は朝廷のことに関して取り次ぎをすることができなくなったと言ってきた。この連絡を受けて、とても驚いた。

典侍禅尼が自宅謹慎に入つた後は、禅尼の親類である右衛門督局が勾当内侍に任命された。ただし右衛門督局も禅尼の件があるのでやはり二年ほど実家で謹慎しており、必要がある時だけ朝廷に呼び出されていたそうだ。ところが兼ねてからうわさには聞いていたことだが、その間、別当局がずっと勾当内侍の職につきたいと運動していた。そしてその結果、ついに別当局が勾当内侍に任命されてしまった。前任者である右衛門督局の面子は丸つぶれとなつたし、老後の典侍禅尼にしても恥辱を与えられた結果となつてしまった。とてもかわいそうなことだ。

藤原能子は足利義満から絶大な寵愛を受けていた

典侍禅尼は、故北山殿足利義満殿の時代に義満公から絶大な寵愛を受けており、それはなによりも名誉なことであつた。いまでも暫しそのことを思い出すと、それはそれは夢のような時代であつた。天人五衰とい

って、天上界にいる長寿の天人にも、死の直前には五つの兆しが現れるという。今回の悲運は、榮華を極めた典侍禪尼にとつての五衰というベキであり、典侍禪尼ご自身もさぞやお嘆きのことであろう。

用健、大光明寺大通院の院主に就任する

さて用健が本日、塔頭大通院の院主として大光明寺にお入りになった。めでたいことである。大光明寺長老が鹿苑院主にご相談なさったところ、何も問題はなからうと鹿苑院主が仰ったそう。それで、今回の院主就任となった。

用健の院主就任を妨害していた僧は、さぞや無念に思っていることだろうと思うと、さらに喜びがこみあげてくる。それに、用健の院主就任は亡き父・大通院の念願でもあったようだ。

夜、月に導かれて、指月庵へ行き、しばし納涼した。そして深夜に宮家へ帰った。この納涼に、稚野・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・稚児の洪得も連れて行った。

十四日、晴。祇園会の内祭を稚野寺主が主催して下さった。それでお酒を飲んだ後、稚野はお寺に帰っていった。

私の姪である御稚児の鳴滝御所が来たる十七日に出家なさるそう。稚野とは師弟関係にあるので、稚野に出家の御戒師をお願いするということだ。

称光天皇の病状がさらに悪化する

十六日、晴。このところ天皇陛下のご病気がさらに悪化しているというところで、日本国中に衝撃が走っている。諸寺にお祈りするようにご命令が下っているようだ。いろいろな噂が飛び交っていて、驚き入るばかりである。

明日、船遊びをしようと思っていたが、このような事態なので、中止することにした。残念である。

子供相撲

即成院念仏の法会へ参列しに行った。いつものように宮家の女性たちや男どもも一緒だった。念仏が終わってから、子供相撲があった。子供たちで十番あまりの取り組みがあった。

十七日、晴。祐誉僧都が来た。これは船遊びの仲間に加えると先だって約束していたので、来たのである。神妙なことだ。しかし船遊びを延期したのは残念なことだった。祐誉は一献の酒を少し持参してきた。その酒を飲んだ後、伏見荘内の寺庵を見て歩いた。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸も祐誉と一緒に歩いた。

まず退蔵庵の池のあたりを散歩した。退蔵庵主がお茶を勧めてくれた。次に大光明寺へ行った。塔頭大通院へ立ち寄り、しばらく院主の用健と雑談した。次に指月庵へ行き、しばらくしてから帰った。

宮家でまた一献の酒宴をした。そこへ松崖が来て、さらに洪得・本玖の二人の稚児もやって来た。松崖がさらに酒宴を主催した。その後、祐誉が出ていった。

いつものように風呂に入った。二人の稚児は今夜、宮家に泊まった。それなので、殿上の間で酒盛りとなった。この酒盛りは、宮家の男どもや稚児の梵祐が開いたものさうだ。

鳴滝御喝食が得度した

ところで、今日は御稚児の鳴滝御所が出家する日である。稚野の寺である浄金剛院で、ご出家の儀式をしたそう。鳴滝のご住職が病気なので、稚野のお寺で出家するよう、ご住職が申し入れたそう。

お忍びで船遊びをする

十八日、晴。船遊びを延期したのが残念だったので、今夕、納涼として秘かに船に乗った。まず川沿いに指月庵へ寄った。松崖・田向前参議・重有・長資朝臣・慶寿丸・稚児の聖乗や梵祐・某らを連れて行った。

お忍びなので、船頭は呼ばなかった。御所の侍三人に操船させた。宇

治川の中島に降りて、酒を飲んだ。その時、既に日が暮れていたのので、船に乗って帰った。少しだけ涼をとることができて、楽しかった。

二十日、晴。田向前参議の十二歳の娘が崇賢門院に仕えることとなった。上皇御所の女房小兵衛督が仲介したそうだ。この娘は女院の御所で召し使われるという。

吉田経房の記録

二十二日、晴。万里小路時房中納言が長資朝臣を通して申し入れてきた事がある。時房の先祖である吉田経房卿の記録(※)は著名な日記である。そこでこの伏見宮家で必ずやこの日記を写し置かれていらつしやるに相違ない。そこでその記録を書写したいので、お願いしますとのことだった。

それで所持している記録類から捜してみたら、朝覲行幸(※)の部類記(※)の中に吉田経房が書いた記録があった。それを書き写して一巻にまとめて送った。時房は大変恐れ入りますと言っていた。

※「吉田経房卿の記録」：まとまった記録としては「吉記」が有名。

※朝覲行幸(ちようきんぎようこう)：天皇が親である太上天皇・皇太后を訪問すること。

※部類記(ぶるいき)：日記・記録から特定の事柄について記事を抄出し編集したもの。

足利義持が退蔵庵に来た

二十五日、晴。朝早く室町殿が退蔵庵へお入りになった。室町殿のお相伴として、鹿苑院主・等持寺住職・宝寿院主らもいらつしやった。軽食を終えたら、すぐに京都へお戻りになったそうだ。大光明寺へいらつしやらなかったのは、なぜだろうか。

毎月恒例の連歌会を、いつものように長資朝臣が準備した。冷泉正永も長資とともに今月の幹事だったが、差し障りがあつて来られなかった。それで、長資一人が準備したのである。参加者はいつもの通りだった。

天神の名号と松・梅の脇絵を新調した

南無天満大自在天神という天神の名号を書いた軸と玉阿が描いた松と梅の脇絵二幅を新調して、今回初めて懸けた。この天神の名号は、妙法院宮堯仁法親王のご直筆である。

盗人が宮家殿上の間にある番衆の私物を盗んだ

二十六日、晴。今夜、盗人が宮家殿上の間に忍び込んで、番衆である御所侍国右と田向家の侍広定の単衣の帷子や腰刀などが盗まれた。きつと内情に詳しい者の犯行であろう。とはいえ詳細は不明なので、捜査してみよう。

足利義持、上杉の屋敷へ入る

さて聞いたところによると、今日、上杉の屋敷に室町殿がお入りになったそうだ。御引き出物の銭三百貫文・金でできた鯉・同じく金でできたまな板・同じく金でできた菜箸・それに銀の御盃などを上杉が献上したという。一献が二十七回も行われて、一献のたびごとに御引き出物が献上されたらしい。

翌日もまた越後国の布を荷車一両分・干し飯を同じく荷車一両分、献上したそうだ。室町殿のお供をしてきた大名どもへも、鎧一両と馬一頭をそれぞれに差し上げたという。

上杉の大盤振る舞い

上杉の屋敷へ室町殿が初めてお入りになったので、このような大盤振る舞いになったらしい。

番衆らに起請文を書かせる

二十七日、晴。昨夜の盗人の件を、厳しく調べた。まず番衆三人に起請文(※)を書かせた。他の者にも起請文を書かせたが、番衆が一番怪しいので、真つ先に書かせたのである。

光台寺へも盗人が入り、資財を少々盗られたそうだ。惣得庵にも盗人が侵入しようとして、木戸が壊されたという。この辺りの内情に詳しい、

地元の者の犯行であろうか。不審である。

宇治川の砂を採る

今日、宇治川の砂を採らせた。その砂を伏見莊村々の馬数十頭で運ばせた。

※起請文（きしようもん）：契約を交わす際などに、約束を破らないことなどを神仏に誓う文書。ここでは自分が盗人ではない事を誓わせたのであろう。

大光明寺住職の「後燈録」講義が終わる

二十九日、晴。大光明寺長老による後燈録の講義、今日が最終日だそう。今日一度聴講しなかったが、残念である。

宇治川の砂を前庭に撒く

昨日運び取った砂を前庭に撒いた。

三十日、晴。いつものように風呂に入った。綾小路信俊前参議が来て、六月祓えの茅輪を作ってきた。これは、近年の佳い例となっている。

この茅輪でいつものようにお祓いをした。

綾小路前参議が一献の酒を持参して来た。それで数献重なる酒宴となった。経良卿らも一緒に飲んだ。

楊梅兼豊が楊梅兼英殺害の件で流罪となる

さて聞いたところによると、今日、楊梅兼豊朝臣が召し捕られたそう。これは、楊梅兼英朝臣が変死したのが兼豊の犯行であると判明したためである。將軍により召し捕られて、兼豊は流罪にされたそう。

孟秋（七月）朔日、晴。「すべてのことがめでたく、とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。お祝いには綾小路信俊

前参議・田向経良前参議・庭田重有朝臣・田向長資朝臣も参加した。

音楽会をした。慶雲楽・楽拍子の万歳楽・三台破・三台急・甘州・五常楽序破急・春揚柳・林歌と朗詠などをした。綾小路前参議が合奏してく

れた。

山崎神人が石清水八幡宮社務田中融清の屋敷に神輿を振り入れる

ところで聞いたところによると、石清水八幡宮長官の社務田中融清の屋敷に山崎神人が押しかけていき、お神輿を敷地内に振り入れ、屋敷も散々に打ち壊したそう。それで、寄せ手の山崎神人の多くが殺され、社務の家臣の多くが怪我をした。事の発端は、石清水八幡宮鳥居足となる材木の費用負担をめぐる問題だという。

長資朝臣が朝廷の小番を勤めに行った。

二日、晴。朝早く音楽会をした。双調の鳥破・鳥急・颯踏入破・賀殿急・

春庭楽・北庭楽・陵王破と朗詠などをした。秋夜待月（※）という朗詠を習った。

長資朝臣が帰ってきた。彼によると、天皇陛下のご病氣は次第にご回復しているそう。めでたいことである。

※秋夜待月：『和漢朗詠集』妓女七一。

三日、晴。今日も朝早くから音楽会をした。桃花花二帖・喜春楽序・喜春楽破・河南浦・海青楽・拾翠楽・平蛮楽、それに朗詠の三十五名之星躰

（※）を習った。綾小路前参議一人が合奏してくれた。

漆塗りの団扇

夕方に退蔵庵へ行った。綾小路前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。庵主としばらく雑談をした。お茶や瓜などを勧めて下さった。瓜を味わったのは珍しい事だった。漆塗りの団扇（※）も進上していた。近年、毎年このようなご芳志をいただいて、うれしいことだ。

松崖の御寮である衆寮が来た。しばらく納涼して帰った。

夜にまた音楽会をした。打毬楽・太平楽・道行破急・傾盃楽急・輪鼓禪脱・仙遊霞・抜頭・王昭君・長慶子や朗詠などをした。

※三十五名之星躰：『新撰朗詠集』十五夜二二四。

※「漆塗りの団扇」：原文では「塗り打輪」とある。

四日、晴。今日もまた朝早くから音楽会をした。退宿徳・皇仁破急・狛杵・崑崙破急・新鞆鞆・納曾利・長保楽破急・林歌・朗詠などをした。綾小路前参議が合奏してくれた。

船遊びの納涼

今日は船に乗って遊ぶ会をした。小川禅啓が取り仕切ってくれた。まず指月庵へ行った。松崖・綾小路前参議・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・阿古丸・稚児の梵祐と本玖を連れて行った。また村人たちも禅啓ら六〜七人連れて行った。琵琶法師の城宇座頭も呼んだ。

午後三時に東津から船に乗った。船の周りでは、漁船が五〜六艘、簀^す垣^{がき}の中に釣り糸を垂れている。そうしたらスズキが二〜三匹釣れた。

一献の酒宴の最中、楽拍子の採桑老・蘇合三帖を演奏した。笛は綾小路前参議、笙は長資朝臣、琵琶は私が弾いた。その後、城宇座頭が平家物語を二句語った。

次にまた釣り糸を垂れた。それで鯉やスズキがたくさん獲れた。面白かった。

その後、川上の中島に船を寄せて下船し、それぞれが席に着いた。そこで一献の酒宴があった。また酒宴の間、朗詠も歌った。この朗詠には笛や笙の伴奏が付いたが、笙は綾小路前参議が吹いてくれた。この他にもいろいろな芸能や平家語りがあって、とても楽しかった。

そろそろ日も影ってきたので、席を立てて船に乗った。船上でまた音楽を奏でた。蘇香急・輪台・青海波・千秋楽を演奏した。音楽が終わって、宮家へ帰った。

鱸の包丁式

宮家の女性たちがスズキを食べたいということで、広時が私の御前で包丁式を行い、スズキをさばいた。それでまた一献の酒宴となった。とても酔ったので、私は寝所に入った。

納涼が無事終わり、とても面白かった。この船上の納涼は、毎年の恒

例行事となっている。

五日、晴。朝早く音楽会をした。老越調の回盃楽・春鶯囀序・颯踏入破・鳥急・賀殿破急・北庭楽・胡飲酒破・陵王破と朗詠などをした。長資朝臣が太鼓を打った。綾小路前参議の伏見宮家滞在中に六調子すべてに渡って演奏した。その後、綾小路は帰っていった。綾小路は上皇御所の七夕音楽会に出席するというところで、急いで出ていった。

ところで、来たる十二日、室町殿が大光明寺へいらっしやるそうだと今朝、鹿苑院からそのような連絡があったという。

雲脚茶会

六日、晴。殿上の間で雲脚（※）茶会をした。長資朝臣が当番の幹事だった。琵琶法師の城宇に平家物語を語らせた。

ところで、天皇陛下のご病状がまた悪化して、一大事となっているそうだと。多くの医者が陛下の治療を断念したという。

※雲脚（うんきゃく）：一般には粗悪な抹茶をいう。しかし雲脚は茶を立てる際の茶と湯の比率に関する言葉で、むしろ上級なお茶ではないかという説もある。

七夕草花法楽

七日、晴。朝早く、いつものように梶の葉に和歌を書いた。七夕の草花奉納のため、面々が花を進上してきた。それで座敷を少し飾った。屏風を立て廻して、中国風の絵を懸けた。本尊の前に毛織物を敷き、そこに花瓶二十本を立てた。

花瓶を進上してきた人々

自分三瓶、松崖一瓶、田向前参議一瓶、重有朝臣一瓶、長資朝臣一瓶、稚児の洪得一瓶、稚児の本玖一瓶、法安寺一瓶、即成院二瓶、光台寺一瓶、玄忠一瓶、行光一瓶、禅啓一瓶、有禅一瓶、宝泉二瓶など、各々が献上してくれた。なお宝泉は堆朱（※）のお盆二枚・亜子が描いた中国風の絵三幅・毛織物一枚も提供してくれた。

大光明寺へ行き、光厳上皇のご位牌に焼香した。また塔頭大通院にもお参りした。長老とお会いして、お茶や瓜のもてなしを受けた。すぐに帰って、風呂に入った。

その後、御節供のお供えをして、次に花を鑑賞した。特別に一献の酒宴もあった。用健・松崖・芝殿・惣得庵主・明元・稚児の洪得・本玖・具侍者・寿蔵主らが参加した。いつものように宮家の女性たちや男どもも参加した。

琵琶法師の城宇座頭

琵琶法師の城宇座頭と相弟子の座頭が来た。酒宴の間、音楽・朗詠・平家語り・雑芸などいろいろな趣向があった。最近の酒盛りとしてはもつとも面白かった。真夜中に酒宴が終わった。とても酔っ払った。私と松崖は二人の稚児と一緒に寝た。

聞くところによると、上皇御所の花合わせもいつも通り行われたそうだ。音楽会もいつも通りだったという。

※「堆朱」…原文では「堆紅」とある。

琵琶法師の城義勾当

八日、晴。座敷の花はまだ撤収していない。琵琶法師城公の弟子である城義勾当が来た。先日蔵光庵で城義の平家語りを聞いた。それでまた聞きたくて、城義を宮家へ呼んだのである。城義は平家物語を七句語ってくれた。その間、一献の酒を飲んでた。そして音楽も演奏した。今日もとても楽しかった。松崖・芝殿・寿蔵主・善基らが酒宴に参加した。城義には型通りの褒美を与えた。

九日、晴。花瓶を少々撤収した。お盆にむけてお経を読み始めた。

十日、晴。長資朝臣が朝廷の小番を勤めに出かけた。そのついでに新しく長階局になった東坊城茂子殿への手紙を長資に託した。勾当内侍に任命されておめでとうございますというお祝いの手紙である。

十一日、晴。長資朝臣が帰ってきた。新任の勾当内侍の返事は丁寧なもの

だった。天皇陛下のご病状は、また少し良くなっているとのことだった。

さて室町殿が明日、大光明寺へお出でになる。塔頭大通院で軽食をお召し上がりになるそう。その間、こちらからお礼申されるのがよろしいでしょうと、皆から意見が出された。それに伴って、何でもよろしいですからご進物を差し上げたらいかがですかとも、皆が言っていた。

宮滝御幸記（天神御記）

ちょうど都合のいいものを持ち合わせていなかったため、代々大切にしてきた物の中から、宮滝御幸記（天神御記）（※）を選び出して、差し上げることにした。それで、この一冊の中から和歌などを少々写し取った。大部の本なので、すべて写し取れなかったのが残念だ。

※「宮滝御幸記（天神御記）」…宮滝御幸記は、昌泰元年（八九八）の宇多上皇の宮滝御幸の記録である。菅原道真が記録したので、「天神御記」とも呼ばれたのであろう。竹居明男「菅原道真作『宮滝御幸記』考」（和漢比較文学会編『菅原道真論集』、勉誠出版、二〇〇三年）。

十二日、晴。朝早く室町殿が大光明寺へお入りになった。塔頭大通院で軽食をお摂りになっている。お相伴しているのは、鹿苑院主・常在光院主・等持院主・宝寿院主・大光明寺長老らである。また大名六人がお供している。軽食が終わって、指月庵をご覧になっているそう。

田向前参議を使者として送った。鹿苑院主にお取り次ぎいただいて、室町殿へお礼を申し上げ、書籍一巻を差し上げた。指月庵での読経が終わってから、室町殿へお礼が伝えられたそう。室町殿は、この書籍一巻は特別な重宝なので、大事にしますとのお返事だったそう。お喜びだったと聞いて、うれしかった。その後、すぐにお帰りになったという。

宮滝御幸記は一般には知られていないものだと思う。菅原道真すなわち天神による記録（※）なので、他とは違う重宝である。この本の裏紙に崇光上皇による銘文がある。そこには「これを一見する人は、まずすべからく口を漱ぎ手を洗うべきである。それはこの本が神記だからであ

る」と書かれてある。代々大事にしていた御物を私が自分勝手に扱うことは少々憚られることに違いない、しかしそのような重宝だからこそ室町殿に差し上げたのである。しかたのないことだ。

松崖が今日、京都嵯峨のお寺へ帰っていった。この数ヶ月、この辺りに滞在していた。そして無事にお寺へお帰りになった。心安く、まためでたい事である。

※「菅原道真すなわち天神による記録なので」：原文では「神記なので」とある。

十四日、晴。いつものようにお盆の儀式をした。大光明寺へ行き焼香した。長老にお会いして、しばらくして帰った。

夏の修行期間中、雅楽の練習をしていたが、今日がその最終日である。また蘇合四帖を毎日暗譜していたが、それも今日で無事終わった。うれしい限りである。

十五日、晴。いつものように、蓮飯をお供えした。その後、大光明寺へ行き、施餓鬼に参列した。東御方・廊御方・上臈・二条殿、田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸らも参列した。大光明寺長老や西堂以下四十六人もの僧が施餓鬼を行った。施餓鬼が終わってから帰った。

畠山重保が人飛礫を飛ばす様子を物真似する

いつものように石井村や舟津の念仏囃子の行列が、お盆の期間中夜な夜なやって来た。今夜は、両方の囃子行列と一緒に宮家御所へやって来た。少し物真似芸も行われた。石井の物真似は、畠山重保が人を石つぶてのように投げ飛ばす様子を再現したものだ。

ところで今夜、今日の北小路と今出川通の交差点あたりで火事があったそう。

十六日、晴。松崖がふとやって来た。稚児の胃堅に関する用事があって急に京都へ出てきたそう。用健も来たので、少し酒を飲んだ。その後、用健・松崖ともに田向家へ招かれて行った。私も一緒に行こうと頻りに

誘うので、行くことにした。田向家でも一献の酒宴を少し行った。

いつものように即成院の念仏に参列した。

十九日、晴。明日、塔頭大通院へ行こうと思う。造営が終わって以後、いまだお礼を言いに行っていないので、大光明寺長老や院主の用健にお祝いを言うつもりだ。とりあえず寿蔵主を通して、軽食料の錢三貫文を送った。長老たちはお喜びになっていたそう。椎野寺主が来た。

東坊城長遠の死

さてたった今聞いたところによると、東坊城長遠卿が今日亡くなったそう。これでまた紀伝道(※)がいよいよ零落していくのは、日本の国として惜しむべきことだ。長遠が菅原氏の氏長者(※)になれずに亡くなったのは、とてもかわいそうな事だ。天神様の思し召しはどのようなものだろうか。

東坊城茂子勾当内侍が称光天皇病氣平癒祈願を遂げざるは不吉

長遠卿の妹である勾当内侍は、天皇陛下のご病氣平癒をお祈りするため、伊勢神宮へ向かっていた。ところが兄・長遠の計報を聞いて、参詣を遂げずに途中で京都へ戻ったそう。これは不吉な事ではないだろうか。

※「紀伝道」：原文では「頌道」とある。

※「菅原氏の氏長者」：原文では「北野長者」とある。

二十日、晴。朝早く塔頭大通院へ行った。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。軽食があつて、長老・用健・田向前参議がお相伴してくれた。別の座敷で、退蔵庵主・蔵光庵主・重有朝臣・長資朝臣らは軽食を食べた。寿蔵主が今回の件の仲介してくれた。軽食が終わってから、しばらく雑談した。その後、仏殿で焼香してから、帰った。

大通院を造り終わったのは、ひとえに長老の忠節によるものである。また用健も院主を勤めているので、お二人にお礼の気持ちを表してきたのである。

故今出川南向の七回忌

ところで今日は、今出川公直の妻であった故南向の七回忌である。忙しくて法事をする事ができなかった。残念である。

今年も足利義持への八朔贈答は禁止される

二十三日、晴。室町殿に対する八朔贈答を去年のように禁止なさるのかどうか、広橋と相談するため、田向前参議が京都へ出かけた。そして夕方、帰ってきた。今年も、去年のように禁止するそうだ。

天皇陛下のご病気がまた悪化しているそうだ。そのことで、室町殿から朝廷と上皇御所へ広橋を通して、いろいろと連絡がなされたと、広橋自身が語っていたという。きっと重大な事態なのであろう。

二十四日、晴。こちらからお願ひして、大光明寺の風呂へ入らせてもらった。冷泉正永が来た。

二十五日、晴。昼にわか雨が降った。毎月恒例の連歌会、いつものように重有朝臣と正永が当番の幹事として準備してくれた。椎野・田向前参議・重有・長資ら朝臣・正永・善基・行光・禅啓らが参加した。稚児の洪得も参加した。夕方前に百韻を詠み終わった。今回は早く読み終えることができた。

二十六日、晴。正永が帰っていった。椎野も自分のお寺に戻っていった。二十七日、晴。重有朝臣が八朔贈答の件で、京に出かけ、すぐに帰ってきた。

永松庵で草花を鑑賞する

二十八日、晴。風呂に入り、その後、永松庵へ行き草花を一覧した。言葉に表せないほど、すばらしかった。最近、いろいろな人が永松庵の草花を觀賞していくそうだ。酒樽などを持ち込んで、草花を見た。玄超が恐れ多いことですよと行って、軽食などいろいろと用意してくれた。それで一献の花見酒となった。酔いつつも和歌を詠んだ。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣も同じく詠んだ。題は草花である。

酔いながら草花を和歌に詠む

私の詠んだ和歌

百草は すべて見れども 花の色の

かかる情けは 類あらめや

植へ立つる 花の主に 契りおかん

幾世の秋も 来てぞ見るべき

経良卿の詠んだ和歌 永松庵の庵号にかけて詠んだそうだ

万代も 永き試しの 松陰は

千種の花も 十かえりや咲く

重有朝臣

植えて見る 千秋の宿の しるしとや

露も異なる 花の色かな

長資朝臣

咲き乱る 千種の花の 色々は

錦をさらす 庭かとぞ見る

清和院の僧が声明を歌う

同宿の老僧を呼び出して、酒を与えた。この僧は清和院の僧だ。去る頃よりこの庵に居住している。昔は伏見御所の四月六日の法事讃の法会にも参動したことがあるそうだ。声明が上手だと聞いていたので、お願ひして歌ってもらった。すばらしい。私が持っていた団扇を与えたら、とても恐れ多いことですよと行っていった。

経良も酔っ払ってきたので、謡を唸った（※）。数献に及び、酔っ払ってきたので、座を立って帰った。

宮家の女性たちにもお土産として、廊御方の部屋で酒を振る舞った。田向前参議はとても酔っていて、ここでも謡を歌った（※）。

ところで葉室宗豊朝臣が、早くも八朔の贈答品として御帷子を贈ってきた。去年は進上しなかったもので、そのかわり早々に送ってきたのであ

ろうか。

※「謡を喰った」・「謡を謡った」：原文ではそれぞれ「一声を出す」・「一声に及ぶ」とある。

二十九日、晴。明日の八朔贈答品の用意にかりつきりだった。昨日の永松庵で酔いながら歌った和歌を短冊に書き改めて、永松庵に送った。

八月一日、晴。「すべてのことに、良い兆しがある。めでたい、めでたい」と予祝した。いつものように宮家の男女が御憑の贈答品を献上した。田向前参議もいつものように、御憑として一献の酒宴を用意してくれた。酒宴が度重なり、ただただ八朔を祝った。

後小松上皇へ鶴頭一双などを贈る

さて上皇様へは鶴頭という首の細長い瓶を二つ贈った。これは模様のある茶碗であり、蓋もついている。それに□（一字欠落）葉の地紋に雁が打ちつけられている銚子提と引合紙三十帖を、いつものように冷泉永基朝臣を通して進上した。お返事はあとで上皇様から下さるそうだ。「この鶴頭はすばらしい」と、上皇御所の面々が褒めていたそうだ。

室町殿への進物は停止されているので、なんとなく冷やかな感じがする。宮家外様の家司である正親町三条家や勧修寺家からも御憑みの贈答品が届いた。その他、いつものように椎野寺主たちからも届いた。

二日、晴。いつものように廊御方の二日頼みで、一献の酒宴をした。

三日、晴。いつものように三日憑みとして、私の息子や廊御方から贈答があった。

四日、晴。相応院主弘助親王殿から御憑みの品が届いた。以前は昨日の三日に届いていたが、遅れたようだ。すぐにお返事をして、ありがたく受け取った。

浄金剛院椎野寺主が眼病を患う

椎野寺主が来た。このところ眼病に罹っているので、しばらく養生のため宮家に滞在なさるそうだ。

前庭の梨を拾う

五日、晴。前庭の梨が今年はたくさんの実を付けた。上皇様へ進上するために、宮家の男女が集まって、梨を拾った。むやみに群れ集まったのは感心しないが、それでも楽しかった。

冷泉永基朝臣が御憑を進上してきた。こんなに遅れるとは、どういうことだろうか。

芳徳庵主が一献を持参していらっしやったので、一緒に酒を飲んだ。

田向前参議が石清水八幡宮放生会の件で京都に出ていたが、たった今戻ってきた。とても酔っている。広橋・裏松らとあって、大酒を飲んだそうだ。

その酒宴で広橋が言うことには、伏見宮家の若君について、室町殿が上皇御所へ行かれた際にいろいろと取り沙汰されていたそうだ。御年齢などいろいろとお尋ねになっていたという。どのような趣旨でそのように取り沙汰なさったのか、よく分からない。

天皇陛下のご病気について、世間ではいろいろと噂していることから、このように室町殿は取り沙汰されたのであろうか、まったくもって分からない。でもこのように取り沙汰されたのは、ありがたい事である。田向前参議は酔っ払った余り、謡を喰りだした(※)。それで酒盛りとなった。夜になって、年老いた尼である芳徳庵主はお帰りになった。

※「謡を喰りだした」：原文では「一声を出す」とある。

後小松上皇に梨を贈る

六日、晴。上皇様へ梨二籠をお送りした。すぐにお返事があった。これから食べるのを楽しみにしていますとご丁寧なお返事を下さった。恐れ多くもうれしいことである。

寿蔵主が八朔の贈答として酒一献を進上してきた。すぐにその酒を味わった。田向前参議らも一緒に飲んだ。この一二年ほど寿蔵主は八朔の贈答をやめていたので、再開となって喜ばしいことである。

松崖が来て、また仏法の講義をしたいとのことだった。それでお寺に休暇届を出したという。

七日、晴。前庭の梨がまた採れたので、いろいろな方々へ贈った。

雲脚茶会の結願

殿上の間で行っていた雲脚茶会を続けてきたが、今日がその最終日である。毎回、侍臣等がお茶を献上してきたので、今日は私からお茶を出すことにした。いつもの参加者が皆集まった。

比叡山延暦寺常行堂の番帳を清書する

さて比叡山延暦寺常行堂の番帳を私に書くよう、積善房を通して申し入れがあった。この積善房は延暦寺の僧であるが、伏見荘に住んでいる。番帳の料紙は、裏に薄く淡い模様が入っている。表には月、裏には太陽があり、落躑を舞う舞人二人が描かれている。紅葉や秋草なども描かれている。とても素晴らしい料紙である。

このような番帳の清書を字が下手な者がとても書けるものではない。思いも懸けないことですと断って、料紙を返した。

そうしたら重ねて申し入れてきて、「たとえ字がお上手でなくとも、ただ宮様に書いていただくことで、それがお手本になるのです。まげてお願いします」と丁寧に言ってきた。それで仕方なく、了承した。去年は椎野寺主に書いていただいたそうだった。

八日、晴。朝早く、番帳を清書して積善房に送った。このような素晴らしい料紙に字を書くなど、私にとって似合わないことであることはもとより承知の上である。ただ字を書き間違えなかったことだけが、私としては手柄といえよう。積善房は特に恐れ多くもありがたいことですと言っていた。

九日、晴。今夜から朝廷では内侍所御神楽が三晩続けて行われるそうだった。天皇陛下の御病氣平癒の御祈願だという。綾小路信俊前参議もこの御神楽に出仕するそうだった。

十日、晴れていたが、大風が吹いた。典侍禪尼が八朔のご贈答品を進上してきた。慌ただしくしていたので、遅れてしまったそうだった。すぐにお返事を返した。

祐譽僧都も同じく八朔の贈答品を送ってきた。病氣だったので、今まで遅れてしまったそうだった。怠慢の至りであろう。

さて鳴滝御稚児が出家してから宮家には顔を出していないので、お迎えを送った。それで、すぐに宮家へやって来た。鳴滝御稚児はお土産として一献分の銭を持参してきた。まず用意していた酒肴で一献の祝宴をした。田向前参議らも参加した。

日野資康三十三回忌の相国寺法事を足利義持が主催する

ところで聞いたところによると、今日は故日野資康一位大納言の三十三回忌だそうだった。室町殿の御台所日野栄子殿は、資康卿の娘である。それで御台所以下、日野家一家の人々が莫大な仏事料を出したそうだった。その総額は千七百貫文余りにのぼるといふ。それを相国寺に施入して、室町殿のご主催でお経を略読して供養する法事を行ったそうだった。

十一日、晴。風呂に入り、その後、一献の酒宴をした。鳴滝殿が持参したお土産を味わったのである。この一献の座には、大勢の人が集まった。身内のみならず他人も大勢参加して、賑やかなことであつた。

田向家で灯籠供養の相撲が行われる

十二日、晴。今夜は田向家で灯籠の供養がある。その供養の一環として、村人たちを集めて相撲をとらせる。私も見物に行き、少し酒を飲んだ。十四日、晴。石清水八幡宮放生会に出仕するため、長資朝臣が同宮へ向かった。松崖・田向前参議・重有朝臣・具侍者らも同じく同宮へ参詣に出かけた。

十五日、晴。今日は放生会である。法会の執行責任者の公卿は大炊御門信宗中納言、参議は中院通淳参議兼近衛中将、弁官は坊城俊国、警備責任者は長資朝臣だ。夕方に田向前参議らが帰ってきた。放生会の御神輿巡

行は無事に終わったそうだ。

御香宮にお参りした。私の息子・鳴滝殿・廊御方・上臈・二条殿も連れて行った。

今夜は名月で、いつものように型通りのお月見をした。田向前参議らも参加した。一座の連歌会ができなかったのは残念だった。私一人で三首の和歌を詠んだ。

十六日、晴。即成院念仏の法会に参列した。鳴滝殿や宮家の女性たちも一緒だった。

七仏薬師法の実施に伴い、殺生禁断令が發布される

十八日、晴。朝廷で今夜、七仏薬師法の法会が始まるそうだ。導師は山岡崎僧正で、天皇陛下の病氣平癒の御祈願をするという。この法会が行われる七日間、殺生禁断にするというお触れが出されたそうだ。これは先例にあることなのだろうか。不審である。

十九日、晴れていたが、夜になってにわか雨が降り雷が鳴った。毎月恒例の連歌会、椎野寺主が今月の幹事だ。参加者はいつもの通りである。勝負の賞品として呉器一对・御扇・檀紙十帖の三種を出した。勝負の決め方は、各々良い句を一句ずつ撰び、本尊北野天満宮の掛け軸の前でどの賞品を取るか、くじを引くこととした。それで即成院善基老が良い句を詠み扇を当てた。次に良い句を詠んだ行光が呉器一对を引き当てた。檀紙は面々で取り分けた。雪月花の句を採るなど、面白かった。賞品は私が提供した。

上皇御所会所泉殿の立柱式

ところで上皇御所の御会所である泉殿が、今日、立柱式を迎えた。室町殿によって造営されるそうだ。それで諸人がお祝いの御馬を進上した。宮家からも差し上げるべきだと面々から意見が出された。しかし適当な馬を調達できず、献上しなかった。残念である。

二十日、雨が降った。今夜の七仏薬師法の法会で灯火を持つ役で長資朝臣

が出仕する。

松崖が明日、奈良へ行く。光明真言を聞きに行くそうだ。餞として少し酒を飲んだ。

二十二日、晴。椎野寺主が自分の寺へ帰った。松崖・芝殿・具侍者が奈良から戻ってきた。

二十五日、晴。今日、松崖が禅照庵へ移り住む。これまで退蔵庵にいらつしゃった。伏見周辺でしばらく休暇をとるので、禅照庵に借り住まいするそうだ。

二十七日、晴。祈願することがあつて、御香宮に参った。

ところで聞くところによると、来月十六日に石清水八幡宮へ上皇様がいらつしゃるそうだ。お供の公卿十人・殿上人十二人だそうだ。田向前参議もお供の人数に入っている。これは、天皇陛下ご病氣平癒祈願の御参詣だそうだ。ご病氣が治った後に、大々的な参詣行列をなさるらしい。勸修寺経興中納言と慈光寺持経もお許しが出て、出仕するそうだ。

【頭書】田向前参議が御参詣にお供する件であるが、重要な儀式なので、個人的に差し障りがあると申し出た(※)。それでお供をしなくてもよいことになった。

※「個人的に差し障りがあると申し出た」：田向経良の息子である田向長資の妻が妊娠している(八月二十九日条)ことによる忌避であろう。

後小松上皇お気に入りの牛飼い孫有丸

二十八日、晴。上皇様から八朔のお返しが下された。御牛飼いの孫有丸が使者としてお返しを運んできた。御服二重・堆朱(※)製の大きな食籠(※)・紅梅の薄様に包まれた香木の沈香一つ、それに去年の分の御服三襲・銀造りの太刀一振り・引合紙十帖。二年分のいろいろな重宝を下さった。

余りの多さに戸惑いながらも、とてもうれしかった。いつものように冷泉永基朝臣が取り次いでくれた。孫有丸は初めて宮家に来た。上皇様

お気に入りらしい。酒を与えた。後で聞いたことだが、引き出物の
お裾分けをもらわなかったので、孫有丸はたいそう怒っていたそうだ。

下三栖と伏見荘の山野境争論

ところで、下三栖と伏見荘との山野境に関する争いが起こり、すでに
合戦の企てもあるという。三栖では砦も構えたそうだ。伏見荘でも合戦
の用意をしている。それで仲介人を立てて仲裁しているが、まだ決着し
ていない。

田向前参議が京都へ出かけた。この一件と石清水八幡宮お供の件など
のためだそうだ。

※「堆朱」：原文では「堆紅」とある。

※食籠（じきろう）：漆塗りで蓋付きの食器。

二十九日、晴。上皇様からの八朔お返しを皆に分配した。私の息子・姪の
鳴滝殿・東御方・廊御方・上臈・二条殿、田向前参議・重有朝臣・正永
らに分け与えた。松崖がいらつしゃった。奈良へ行く際の餞に対する返
礼として酒宴をお開きになった。

宮家譜代の御力者有犬ら三人の申し入れ

さて宮家に代々仕える御力者である有犬ら三人が一緒にやって来て
申すことには、「上皇様が石清水八幡宮へ参詣なさる際の輿を昇ぎたい
と上皇御所へ申し入れましたが、そもそも天皇家譜代とはどういうこと
か、どのような者なのかはつきりしないからと言って断られました。我
らは崇光上皇様の御代からお勤めしているので、その証拠を上皇様の事
務方へ提出したいので、なにとぞ証明書をお下し願います」とのこと
であった。

私が取り持つの上皇様がどうお思いになるか分からないので、それ
はできないと断った。それでも重ねて懇願して、「強いて上皇様へお取
り成しいただかなくてもかまわないのです。ただ宮家に代々お仕えして
きたことを証明していただける書類を出して下さるだけでかまいません

ん」というので、女房奉書の形式で書類を出してやることにした。田向
前参議を事務担当者にして、広橋宣光朝臣宛ての書類にした。

「お前たちが宮家譜代の者であることはまちがいないので、書類を準
備しておこう」と伝えたら、各々恐れ多いことですよと言って、出ていっ
た。

三十日、晴。八朔の返礼品を外様の家司たちに送った。

姪を喜ばせるために船遊びをする

ところで姪の鳴滝殿を喜ばせるため、船に乗ることにした。皆がそれ
ぞれ種類の食べ物と一瓶のお酒を持参することにした。船に乗ったの
は、私・息子・鳴滝殿・あこ、御所・松崖・上臈・二条殿・芝殿・小今
参・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主・具侍者・稚児
の梵祐・女官の目々らである。

西船津より乗船した。漁船二、三艘が釣り糸を垂れたが、全く魚は釣
れなかった。簀巻きも三度沈めたが、ついに魚は入らなかった。不思議
なことだ。

懐妊中の妻がいる夫の乗る船は不漁になる

妻が懐妊している夫が乗船している時は不漁になると聞いている。も
しかしたら、そのせいかもしれない。おかしいことだ。魚が獲れなかつ
たのは残念だったが、それも併せて、とても楽しかった。二、三献終わ
って日が暮れたので、急いで宮家へ帰った。

(続)